物に文字を書きつけること

――『うつほ物語』の仲忠の例から――

武藤那賀子

［キーワード　①『うつほ物語』②仲忠 ③書きつく ④遣り取り］

はじめに

『うつほ物語』では、様々な登場人物が、多くの手紙や物を遣り取りしている。王朝物語において登場人物同士が手紙や物の遣り取りをすることは珍しくはなく、むしろ必ずそういった場面が出てくるのだが、『うつほ物語』には、そこに他の王朝物語ではほとんど見られない描写が出てくる。それは、登場人物の間で、紙以外の物に文字を書いて遣り取りがされることである。杉野惠子は「花びらや葉に歌を書くという表現自体は歌物語に既にあったが、恋の歌を書くという用法は、『うつほ物語』独自のものであった」[注1]と述べる。

このような、文字を紙以外のものに書く場面で頻出する「書きつく」[注2]という表現について、田中仁は以下の二つの結論を出している。

〈一〉原則として、「直接に書き付ける」という意味である。

〈二〉内容の価値を「低く言いなす・高く言いなす」という二面性を持つ。[注3]

また田中論文でも指摘されていることだが、物に文字を書く場面では、時に文字を書くのに適さない物にも文字を書きつけている。以下に例を挙げる。

○源実忠からあて宮へ

宰相、めづらしく出で来たる雁の子に書きつく、

「卵の内に命籠めたる雁の子は君が宿にて孵さざるらむ

とて、日ごろは」　（藤原の君　七一）

○源実忠からあて宮へ

かくて、源宰相は、なほ、かの兵衛の君に、思ふことを語ら

ひつつ、「夢ばかりの御返りをだに見せ給へ」となむのたまひける。花桜のいと面白き花びらに、

「思ふこと知らせてしかな花桜風だに君に見せずやあるらむ

これをだに」とて書いて、　（藤原の君　七三）

○藤原仲忠からあて宮へ（使：孫王の君）

かの仲忠の侍従、内裏の御使に、水尾といふ所に詣でて帰るに、をかしき松に、面白き藤の懸かれるを、松の枝ながら折りて持ていまして、花びらに、かく書きつく。

「奥山にいく世経ぬらむ藤の花隠れて深き色をだに見で

『かくなむ』とだに」　（春日詣　一五〇）

○藤原仲忠からあて宮へ

仲忠、空蝉の身に、かく書きつけて奉る。

「言の葉の露をのみ待つうつせみもむなしき物と見るがわびしさ

まして、いかならむ」と聞こえたり。　（祭の使　二〇五）

この他に「面白き萩を折りて、葉に」、「かはらけに」、「朽ちたる橘の実に」、「中のおとどの東面なる竹の葉に」、「黒方に、白銀の鯉くはせて、その鯉に」、「合はせ薫物を山の形に作りて、黄金の枝に白銀の桜咲かせて立て並べ（中略）蝶ごとに」、また作り物の洲浜や鶴などがあるが、いずれもそれぞれの物には三十一文字の和歌が書かれたことになっている。

右記のように『うつほ物語』の登場人物たちは、様々なものに文字を書きつける。では、このように物に直接文字を書く場面は、どのように描かれるのか。また物に直接文字を書くということには、どのような意味があるのか。本稿では、物語内で一貫して物に文字を書き続ける仲忠に焦点を合わせて、考えていきたい。

一　物に文字を書きつける

仲忠は『うつほ物語』の登場人物の中で、物語の最初から最後まで物に文字を書きつけている人物の一人である。もちろん、仲忠はいわゆる普通の「手紙」も数多く送っている。しかし、文字を書きつけた「物」を贈ることも多々ある。では、仲忠はなぜ手紙ではなく、「物」に文字を書きつけなければならなかったのか。まず、仲忠が物に文字を書きつける場面を以下に挙げておく。

①仲忠からあて宮へ（1）

かの仲忠の侍従、内裏の御使に、水尾といふ所に詣でて帰るに、をかしき松に、面白き藤の懸かれるを、松の枝ながら折りて持ていまして、花びらに、かく書きつく。

「奥山にいく世経ぬらむ藤の花隠れて深き色をだに見で

『かくなむ』とだに」とて、孫王の君に、「これを御覧ぜさせ給はば、この花賜はりて置き給へれ。今、ただ今」とて、内裏に参りぬ。あて宮、御覧じて、人々の中に、「こともなし」

と思す人なれば、かく書きつけて、賜ふ。

深しともいかが頼まむ藤の花懸からぬ山はなしとこそ聞け

孫王の君、仲忠に見せ給ひけり。（春日詣　一五〇）

②仲忠からあて宮へ（2）

仲忠、「あて宮に、いかで聞こえつかむ」と思ふ心ありて、かく来歩くになむありける。さて、おのづから殿人になりて、御達などに物言ひ懸けなどする中に、孫王の君とて、よき若人、あて宮の御方に候ふにつきて、この思ふことをほのめかし言へど、つれなくのみいらへつつあるに、さてのみは、えあるまじければ、面白き萩を折りて、葉に、かく書きつく。

秋萩の下葉に宿る白露も色には出づるものにざりける

とて、孫王の君に、「これ、折あらば」とて取らす。持て参りたれば、あて宮見給ふ。（嵯峨の院　一五九～一六〇）

③仲忠からあて宮へ（3）

仲忠、空蟬の身に、かく書きつけて奉る。

「言の葉の露をのみ待つうつせみもむなしき物と見るがわびしさ

まして、いかならむ」と聞こえたり。あて宮、

「言の葉のはかなき露と思へどもわがたまづさと人もこそ見れ

と思ふになむ、聞こえにくき」と聞こえ給へり。（祭の使　二〇五）

④仲忠からあて宮へ（4）

藤侍従、五月のつごもりの日、朽ちたる橘の実に、かく書きつけて、

「橘の待ちし五月に朽ちぬれば我も夏越をいかがとぞ思ふ

五月雨の過ぐるも、恐ろしくなむ」。（祭の使　二一三）

⑤仲忠からあて宮へ（5）

侍従、龍胆の花押し折りて、白き蓮の花に、笄の先して、かく書きつけて、奉る。

「浅き瀬に嘆きて渡る筏師はいくらのくれかながれ来ぬらむ

かく思う給へては久しくなりぬるを、いかで、今宵だに、一言だに聞こえさせてしかな。いらへこそのたまはざらめ。聞こし召すばかりには、何の罪もあらじ」とてなむ奉る。

宮、見給ひて、「いづこにあるぞ」とのたまふ。孫王の君、「東の簀子に」。「さは、琴弾きつるは聞きつらむな。あな恥づかしや。皆、上手ぞや。我は、聞かじ」とて入り給ひぬ。

侍従聞きて、「あな心憂のことや。なほ、あが君仏、今宵ならずとも、たばかり給へ。人よりも、『親に仕うまつらむ』と思ふ心深きを、かかる思ひつきにしより、片時世に経べくは思ほえねば、今更に不孝の人になりぬべきがいみじければ、『いささか思ひ静まるや』とてなむ」と、泣く泣く、夜一夜物語し明かして、つとめて、黒方に、白銀の鯉くはせて、その鯉に、かく書きつけて奉れたり。

夜もすがら我浮かみつる涙川尽きせずこひのあるぞわびしき

とて奉れたり。

あて宮、物ものたまはず。孫王の君、「この度は、なほのたまはせよ。殊に物ものたまはせず、静かなる人の、心魂もなく泣き惑ひ給へば、いとほしくなむ」と聞こゆれば、「聞きにくきこと出で来ば、君の御罪になさむ」とて、白銀の川に、沈の松燈して、沈の男に持たせ、書きつけて遣はす。

川の瀬に浮かべるおのが篝火の影をやおのがこひと見つらむ

などのたまふ。（祭の使　二三三六～二三三七）

⑥和歌を詠みあう（1）

かくて、御かはらけ始まり、箸下りぬ。人々の御前の折敷どもを見給ひて、仲忠の侍従、花園の胡蝶に書きて、

花園に朝夕分かず居る蝶を松の林はねたく見るらむ

（吹上・上　二二五一）

⑦仲忠からあて宮へ（6）

仲忠は、大殿に車牛二つ・馬二つ、侍従の君に鶴駮なる馬の丈八寸ばかりなる一つ。置口の衣箱一つに、あるが中に清らなる女の装ひ一具畳み入れ、一つには麗しき絹・綾など入れて、孫王の君に心ざし、黄金の船に物入れながら、かく聞こえて、あて宮に奉る。

荒るる海に泊まりも知らぬうき船に波の静けき浦もあらなむ

とて奉り給へり。

さて、宮・君達など、「ありがたく興ある物かな」とて、ののしりて見給ふ。かくて、集まりて、見ののしりて、『持たらばや』と思へど、わざとある宝々しき物なり」とて、使には、白張一襲・袴一具賜ひて、かくのたまひて遣はす。

波立てば寄らぬ泊まりもなき船に風の静まる浦やなからむ

とて、返し遣はしたれば、仲忠、「いと心憂し」と思ひて、「かう聞こえて、御返り言も賜はらで来ね」とて奉る、

さもこそはあらしの風は吹き立ためつらき名残りに帰る船かな

とて奉れっ。（吹上・上　二二七六）

⑧仲忠からあて宮へ（7）

かくて、御船ども漕ぎ寄せて、御船ごとに祝詞申して、一度に御祓へするほどに、藤中将の、御祓への物取り具して奉る、黄金の車に黄金の黄牛懸けて、乗せたる人・つけたる人、皆金銀に調じて、かく聞こえ奉る。

月の輪のかけてや世々を尽くしてむ心を遣らむ雲だにもがな

と聞こえたり。あて宮、

雲にだに心を遣らば大空に飛ぶ車をばよそながら見む

とて返しける。（菊の宴　三三三三）

⑨仲忠からあて宮へ（8）

仲忠の中将の御もとより、蒔絵の置口の箱四つに、沈の挿櫛より始めて、よろづに、梳髪の具、御髪上げの御調度、よき御仮髻・蔽髪・釵子・元結・えり櫛より始めて、ありがたくて、御鏡・畳紙・歯黒めより始めて一具、薫物の箱、白銀の御箱に、唐の合はせ薫物入れて、沈の御膳に、白銀の箸・薫炉・匙、沈の灰入れて、黒方を、薫物の炭のやうにして、白銀の炭取りの小さきに入れなどして、細やかにうつしげに入れて奉るとて、御櫛の箱に、かく書きて奉れたり。

唐櫛笥あけ暮れ物を思ひつつ皆むなしくもなりにけるかな

とて、孫王の君に、夏冬の装束して心ざす。御使、さし置きて帰りぬ。

（あて宮　三五四～三五五）

⑩仲忠から藤壺へ（1）

殿上に、酒飲みののしりて、鍋の蓋の返り言は、物取り食ふ翁の形を、御膳まろがして作り据ゑて、それに、かく書き給ふ。

「白妙の雪間掻き分け袖ひちて摘める若菜は一人食へとや

糞時は、まだ過ぎ侍らざりける」とて奉れ給ふ。

（蔵開中　五四七）

⑪和歌を詠みあう（2）

かくて、いぬ宮に餅参り給ふとて、女御の君折敷の洲浜を見給へば、例の、鶴二羽、しかよろひてあり。（中略）尚侍のおとど、折敷ながら、外にさし入れ給へれば、右大将、

姫松は乙子の限り数へつつ千歳の春は見つと知らなむ

とてさし出づれば、異人は見給はず。おとど、宮たち、宰相の中将、良中将、蔵人の少将、宮あこの大夫、皆、詠み給へれど、書かず。

（蔵開・下　六〇五～六〇六）

⑫仲忠から藤壺へ（2）

右大将殿、大いなる海形をして、蓬萊の山の下の亀の腹には、香ぐはしき裏衣を入れたり。山には、黒方・侍従・香衣香・合はせ薫物どもを土にて、小鳥・玉の枝並み立ちたり。海の面に、色黒き鶴四つ、皆、しとどに濡れて連なり、色は、いと黒し。白きも六つ、大きさ、例の鶴のほどにて、白銀を腹ふくらに鋳させたり。それには、麝香・よろづのありがたき薬、一腹づつ入れたり。その鶴に、

薬生ふる山の麓に住む鶴の羽を並べても孵る雛鳥

いづくよりともなくて、夕暮れのまぎれに舁き据ゑたり。

（国譲・中　六九四～六九五）

以上の十二例が、仲忠が物に文字を書いて送る場面である。[注4]

このうち、⑥⑪について先に述べておく。⑥は、吹上浜で迎えた三月三日の節供の酒宴の場面である。源涼の祖父にあたる神南備種松が、仲忠たち客人をもてなすために用意した折敷に描かれた「花園の胡蝶」のところに、仲忠は文字を書きつけている。[注5]⑪は仲忠と女一の宮の娘であるいぬ宮の百日の祝いの日に、

兼雅と俊蔭の女から贈られた洲浜に、兼雅、仁寿殿の女御、俊蔭の女、女一の宮、仲忠の五人が和歌を書きつけた場面である。これらは、大勢の人物がいるところで物に文字を書きつけており、仲忠とある特定の人物の間で遣り取りされたものではない。よってこの二例は、仲忠が物に文字を書きつけている場面ではあるものの、他の例とは異なる。この⑥と⑪を除いた例について、以下に考察していく。

二　自然の景物に文字を書きつける

仲忠についてもう少し詳しく見ておこう。仲忠は、俊蔭の女と藤原兼雅との間に生まれた一人子である。俊蔭の女の父親、清原俊蔭は、「かたちの清らに、才のかしこきこと、さらに譬ふべき方なし」（俊蔭　九）と言われ、「婿にせむ。婿にせむ」（俊蔭　二〇）と娘や妹を持つ人々から請われた。また、俊蔭の女も「十二、三になる年、かたち、さらに言ふ限りなし。あたり光り輝きて、見る人まばゆきまで見ゆ」（俊蔭　二二）と言われ、帝や春宮、上達部や親王から求婚された。仲忠の父親である藤原兼雅も、「玉光り輝くうなゐ」（俊蔭　二四）であり、兄弟の中でも特に親に大切にされていた。そして仲忠自身も、誕生時にも成長してからも「玉光り輝く男」（俊蔭　三四）であったことが書かれ、十二歳のときには「かたちの麗しくうつくしげなること、さらにこの世の者に似ず」（俊蔭　四二）という状態であった。

その仲忠が初めて物に文字を書きつけたのは、②のあて宮に求婚する場面である。[注6] そもそも仲忠は、「婿にせむ。婿にせむ」（俊蔭　五六）と方々から請われていたのを一切承諾せず、その心中は「左大将殿にこそ、さるべき世の有職は籠りためれど、また、をかしき君たちあまたありて、心も遣らめ。そこならではあらじ」（俊蔭　五六）といったものであった。正頼の姫君とならば結婚してもよいが、それ以外は認めない、という考えだったのである。

そのように考えている仲忠は「殿人」になり、正頼邸に出入りするようになる。そこで知り合った孫王の君というあて宮付きの若い女房にあて宮への想いを「ほのめかし言」いはするものの、孫王の君は「つれなくのみいらへつつある」という反応しか返してこない。そこで、このままでは一切の進展が望めないと悟った仲忠は、「面白き萩を折りて」その葉に和歌を書きつける。すると、それまではそ知らぬ顔をしていた孫王の君が、そのままあて宮に和歌を書きつけた萩を持って行ったのである。つまり、あて宮に近づくためには、手紙を送る・求婚の意志があることを示すといった求婚の仕方では効果がなく、そのために仲忠は、物に文字を書きつけるという手段を取ったのである。

では、なぜ仲忠は文字を書きつける対象に「面白き萩」という自然の景物を選択したのか。そこで、付け枝と比較してみよう。付け枝は、その時節にあった植物に手紙を結びつけて送るものである。そのため受取人は、付け枝が贈られてきた際に、差出人の言葉が書かれた手紙がどこにあるのか、すぐに見つけられるだろう。しかし、付け枝ではなく、手紙を結びつける対

象である植物に直接文字が書かれる場合はそうはいかない。受取人が真先に目にするのは、手紙が結び付けられた「植物」ではなく、付加物なしの植物そのものである。差出人の言葉が書かれるべき手紙もない、使への言伝もない。それは、差出人の意図が全く摑めないということである。差出人の意図を探るための手がかりは目の前の植物しかない。ならば、受取人が差出人の意図を知るためには、贈られてきた植物をじっくりと見るよりほかない。たとえ、受取人が差出人に対して興味が無かったとしても、全く意図の読めないものが贈られてくれば気になるものである。差出人たる仲忠の狙いはそこにあったのではないか。また紙ではないものに文字を書くということも、重要なことである。紙に書かれた文字は記号に過ぎないが、物に書かれた文字は記号としての役割を果たすだけではなく、その物と一体化し、記号以上の機能を発揮する。それは、差出人の思いの強さや、差出人が最も強く伝えたい言葉といった、ある意味呪的な機能なのである。

さて、話を付け枝に戻すが、付け枝はその時節にあった植物を選択することで贈り物としての価値を付加するとともに、差出人が最も強調したい自身の気持ちを表出するという効果もある。そうであるとすれば、手紙が結び付けられず、真先に受取人の目にとまる植物とは、差出人の一番強い気持ちそのものではないか。そのように考えると、ここに出てくる植物や自然の景物は、メッセージ性の強いものということになる。そこに和歌、もしくは和歌と少しの散文が書かれる。文字が書かれることで、この自然の景物は、自身が持つメッセージを確実なものとされ、強化される。

また、物語の前半部にあたる①から⑤、⑦から⑨までの仲忠の歌は、あて宮求婚者たちの歌の中の一つとして書かれたものである。このうち、仲忠が自然の景物に文字を書いた①から⑤の例を以下に見ていく。

①は、帝の使いで水尾に参詣した仲忠から、孫王の君を介してあて宮に贈り物をした場面である。あて宮からは返歌があった。②は、前述したように、初めて仲忠があて宮に物に文字を書きつけて送る場面である。ここでも、孫王の君が仲介人になっている。しかし、あて宮からの返事もしくは返歌は書かれておらず、あて宮が仲忠からの贈り物を見たことだけが記されている。③は、仲忠が蟬の抜け殻に和歌を書いた場面である。これに対しあて宮からは返事があった。④は、仲忠が朽ちた橘の実に和歌を書いた場面である。これに対するあて宮からの返事・返歌は書かれていない。

ここまでに仲忠が文字を書きつけたのは、全て自然の景物であることに注目したい。そして、次の⑤で仲忠が文字を書きつける対象物は変化を見せる。

三　作り物に文字を書きつける

⑤の場面を詳しく見るために、⑤の直前の場面を以下に引用する。

月の面白き夜、今宮・あて宮、簾のもとに出で給ひて、琵

琶・箏の琴、面白き手を遊ばし、月見給ひなどするを、仲忠の侍従、隠れ立ちて聞くに、「調べより始め、違ふ所なく、わが弾く手と等しく」と聞くに、静心なし。「身はいたづらになるとも、取りや隠してまし」など思ふにも、母北の方の御ことを思ふに、なほ、いとほしく思ほゆ。思ひわづらひて、隠れたる簀子に立ち入りて、孫王の君に、「などか、一日の御返りはのたまはずなりにし」。いらへ、「侍従の君と、御碁遊ばす折なりしかばなむ」。（中略）侍従、「いくそ度か、思ひ返さぬ。されど、さてのみは、えこそあるまじけれ。いかがせむ」。孫王の君、「物なのたまひそ」とて立ち入れば、「見給へ。さ聞こゆとも、よに悪しきわざせじや」などて引きとどめて、「まめやかには、いかで、よそながら、物一言聞こえさせてしかな。さはありぬべしや」。「いで、あなむくつけ。時々のたまふ返り言、いと聞こえがたうし給ふを、とかくしてこそあれ。思ほしだにかくるこそ、いとめざましけれ」。

（祭の使　二三五～二三六）

仲忠があて宮の弾く箏の琴と今宮の弾く琵琶を立ち聞きしている場面である。あて宮の弾く琴の音色を聞いて「調べより始め、違ふ所なく、わが弾く手と等しく」と思った仲忠は、「身はいたづらになるとも、取りや隠してまし」と考える。これは、仲忠が初めてあて宮に文字を書きつけた物を贈る②の「あて宮に、いかで聞こえつらむ」と考える場面に通じるものがある。

さらに、孫王の君には「などか、一日の御返りはのたまはずなりにし」と手紙を送っても返事がなかったことを問うている。[注7] ②の場面で仲忠が「この思ふことをほのめかし言へど、つれなくのみいらへ」て障害となっていたのは孫王の君であるが、仲忠からしてみれば、あて宮から返事が貰えないことには変わりはなく、②の場合も⑤の場合も仲介をしているのは孫王の君である。

その後、仲忠は孫王の君に「まめやかには、いかで、よそながら、物一言聞こえさせてしかな」と頼み込んではいるものの、孫王の君はとりあってくれない。ならばと仲忠は、⑤に引用したように、「龍胆の花押し折りて、白き蓮の花に、笄の先して」和歌と散文を書きつけるのだが、あて宮は仲忠に自身の琴の音を聞かれたことに対し「恥づかしや」と言って奥に入ってしまう。つまり、②の時とは違い、紙以外のものを書いたのにも拘らず、⑤ではあて宮からの返事はないのである。

すると、仲忠は「泣く泣く、夜一夜物語し明かして」、翌朝に今までのような自然の景物ではなく、作り物である「黒方に、白銀の鯉くはせて、その鯉に」文字を書きつけてあて宮に贈る。この結果、あて宮は、「白銀の川に、沈の松燈して、沈の男に持たせ」て、そこに文字を書きつけて仲忠に返事をする。この時、孫王の君があて宮に返事を催促したこと、また、あて宮が「聞きにくきこと出で来ば、君の御罪になさむ」と言ったことが書かれているが、仲忠にとってはあて宮と孫王の君の遣り取りは知らないことであり、あて宮から返事があったという結果

だけが残る。この⑤の場面を契機として、仲忠は、これ以降、文字を直接物に書くときには、対象となる物を自然の景物から作り物に変える。

では、作り物に文字を書きつけるとは、どういうことだろうか。仲忠にとって、自然の景物に文字を書きつけることは、手紙を書くだけでは得られなかったあて宮からの返信を得るために講じた手段であった。しかし、今回はそれも通用しない。もちろん、②や④のように、これより以前に自然の景物に文字を書きつけたものを送っても、返信が得られなかったことはある。だが⑤は仲忠が、あて宮への想いを一層強くし、「身はいたづらになるとも、取りや隠してまし」と考えている場面なのである。そんな肝心な場面で仲忠があて宮から返事を貰うためにはどうしたらよいだろうか。まず、自然の景物に文字を書くことの何がいけなかったのかを考えるべきであろう。では、自然の景物の何がいけなかったのか。先に述べたように、紙に書かれた文字は記号に過ぎないが、物に書かれた文字は記号としての役割を果たすだけではなく、その物と一体化し、記号以上の機能を発揮する。しかし、自然の景物は時間が経てば経つほど、劣化していくという問題がある。仲忠があて宮に贈った自然の景物の中には、「朽ちたる橘の実」もあったが、それ以外は生き生きとした植物や形が壊れやすいものであった。これらのものは、仲忠がそこに文字を書いて使に持たせた時よりも、使があて宮に届けた時の方が、確実に形は悪くなっているだろう。また、仮にこれらのものが、仲忠が出したときとほぼそのままの形態を保てていたとしても、それほど時間をかけずに、劣化していくはずである。中には、変色して、せっかくの文字が見えなくなるものも出てきたのではないだろうか。そうなると、物と一体化することによって記号以上の機能を発揮した文字は何の役にも立たなくなる。ならば、劣化しない、作り物を贈ればよいということになる。腐ったり劣化したりしない作り物に書かれた文字は永遠に物と一体化し続けるため、その機能を失うことはない。

では、どのような贈り物をするべきだろうか。次の⑦⑧の例を見ていく。

⑦は、源涼のいる吹上浜から帰還した仲忠たち四人の貴公子が、吹上浜で涼から贈られた宝物を、都の人々に配る場面の一部である。仲忠は、吹上浜から持ち帰った「白銀の馬は父おとどに、破子は嵯峨の院に、透箱より始めて、細けの物は北の方に、船と被け物の中に清らなる物は、思ふ心ありて、まだ持」（吹上上　二七三）っていた。この「思ふ心ありて」持っていたものが、⑦の「黄金の船に物入れながら」あて宮に贈った物である。しかし、これは返歌とともにそのまま返されてしまう。それを再び仲忠が贈り返し、「情けなきやうにもあり」（吹上・上　二七七）という理由から、あて宮はこれを受け取る。

⑧はいよいよあて宮が春宮に入内することが決定しそうな時期の、上巳の祓の場面である。仲忠があて宮に贈ったのは、⑦と同様、金銀で作られたものであった。文字を書きつける物が変わる転機となった⑤から⑧までに仲忠があて宮に贈った文字

を書きつけた物を、再掲する。

⑤黒方に、白銀の鯉くはせて、その鯉に、かく書きつけて

⑦黄金の船に物入れながら

⑧黄金の車に黄金の黄牛懸けて、乗せたる人・つけたる人、皆金銀に調じて、

これらはいずれも金や銀で光り輝くものであり、素材もさることながら、その細工も細かいものであることがわかる。つまり、贈り物としては最高級の品物である。しかも、⑤よりは⑦、⑦よりは⑧と、素材がよりよいものになっていく。このことは、自分に対してなかなか良い返事をくれないあて宮に対する仲忠の焦りを表しているといってもよい。さらに、これらの物が日常では使用しないもの、実用的ではないものであることも着目するに価するだろう。

⑨は、あて宮が春宮に入内することが決まり、入内の準備をしている最中に仲忠が入内の祝いの品として贈ったものである。この時に贈られた物は⑤から⑧までとは違い、日常で使用するもの、実用的なものが多いことが特徴として挙げられる。

以上、この⑨までがあて宮求婚譚において、仲忠があて宮に贈った文字を書きつけた物である。では、あて宮求婚譚が収束を迎えた物語の後半では、仲忠はどのような物に文字を書きつけるのだろうか。

四　政治家として文字を書きつける

第一節で挙げた十二の用例のうち、⑩以降は『うつほ物語』の後半にある。あて宮求婚譚も終わり、女一の宮を正妻に迎えた仲忠は、どのような物に文字を書きつけていくのであろうか。

⑩は、俊蔭や俊蔭の女などの遺文の講読を朱雀帝の御前で行っていた仲忠が殿上の間に下がり、そこで宴会を催した際の場面である。殿上の間で源涼、藤原季英、良岑行正などの人々と一緒にいるところに、藤壺（＝あて宮）から贈物が来る。

藤壺より、大きやかなる酒台のほどなる瑠璃の甕に、御膳一盛、同じ皿杯に、生物・乾物、窪杯に、果物盛りて、同じ瓶の大きなるに、御酒入れて、白銀の結び袋に、信濃梨・干し棗など入れて、白銀の銚子に、麝香煎一銚子入れて奉り給へり。炭取に、をのこ炭取り入れて奉り給へり。

集まりて、興じて、皆取り据ゑて参るほどに、大いなる白銀の提子に、若菜の羹一鍋、蓋には、黒方を、大いなるかはらけのやうに作り窪めて、覆ひたり。取り所には、女の一人若菜摘みたる形を作りたり。それに、孫王の君の手して、かく書きたる、

「君がため春日の野辺の雪間分け今日の若菜を一人摘みつる

羹をば、かくなむ仕うまつりなりにたる。聞こし召しつべしや」と書きつけて、小さき黄金の生瓢を奉り、雉の足、

折り物に高く盛りて添へ奉り給へり。

（蔵開・中　五四五～五四六）

これに対する返事が⑩である。この場面は、宴会という大人数がいるところで行われているという点で、⑥⑪に通じるものがあるが、和歌の贈答をしているのは仲忠だけである。しかし、孫王の君と仲忠の遣り取りは⑨までとは違い、軽快なものとなっている。この後の場面を読んでいくと、やはり軽快な遣り取りが続く。

物など食ひ果てて、大将、この物ども奉れ給へる物どもを、さながら取り集めて、返し奉り給ふとて、孫王の君の御もとに、「これを、いと全く返し奉るは、『朝にも、いととく賜はらむ』とて、『器物侍らずは、求めさせ給はむほど、遅くや』とてなむ」とのたまへり。孫王の君など、いみじく笑ひ給ふ。「空言人にて、今さへも空めき給へるかな」とて、「いとよき御厨子所の雑仕なりけり。わきても、かはらけをぞ一つ失ひてける。衣の袖解かれぬべう」と聞こえたれば、集まりて笑ふ。

（蔵開・中　五四七）

求婚ができなくなった今、冗談を言い合うなんとも和やかな場が広がっている。

求婚譚を終え、落ち着くかのように思えた仲忠だが、実はそうではない。物に文字を書きつける回数は激減したが、それに反比例するかのように、手紙がその数を増やす。その理由はおそらく、手紙に書かれる内容が複雑なものになり、和歌のみかもしくは和歌に少しの散文といった短文では足りなくなったからではないだろうか。

しかし、⑫では、求婚時代を髣髴とさせるような贈り物が再び出てくる。⑫は、藤壺の第三皇子（今上帝にとっては第四皇子）の九日の産養の夜に、仲忠が贈り物をした場面であるが、ここで仲忠が藤壺に贈ったものは、あて宮の春宮入内が決まった後の⑨で贈った物よりあて宮に求婚している最中の⑤⑦⑧で贈った物に近い。だがこれは、仲忠が藤壺に求婚をしているわけではない。この時行われていたのは藤壺の第三皇子の産養だが、今上帝の第一皇子を生んだのも藤壺である。まだこの時点で第一皇子は立坊していないものの、藤壺の生んだこの皇子が立坊する可能性は高い。また、この時すでに、仲忠には女一の宮との間に一女いぬ宮が生まれていた。これらのことから、仲忠はいぬ宮を次の春宮に入内させようという考えがあったと読める。

おわりに

仲忠が物に文字を書きつけるようになったのは、手紙や自分のあて宮への想いをあて宮付きの女房である孫王の君に伝えるように頼んでも効果がないことが契機であった。そして、そこで文字を書きつけたのは、花びらや葉などの、自然の景物であった。自然の景物に文字を書き始めた時点では、あて宮から返

事が来ることが多かったが、しかし、「龍胆の花押し折りて、白き蓮の花に、笄の先」で文字を書いたものには、返事が来なかった。そこで、仲忠は今度は作り物に文字を書きつけるようになる。そして、あて宮求婚譚の最中に仲忠があて宮に贈ったものは、金や銀で作られた非実用品であった。

あて宮が春宮に入内することが決まったときに仲忠があて宮に贈ったものは、実用品に変化する。あて宮求婚譚が終結したことで、宴の席では文字を書きつけた物を使用した軽快な遣り取りが行われる。しかし、いぬ宮の入内を視野に入れたとき、仲忠は再び、あて宮に非実用的で華美な贈り物を贈るようになる。仲忠が物に文字を書きつける場面にはこのような流れがある。

＊『うつほ物語』本文は『うつほ物語　全　改定版』（おうふう・一九九五）より引用し、適宜傍線を付した。なお、巻名とページ数については（楼の上・下　九一八）という書式で統一している。

注

1　杉野恵子「花びらや葉に歌を書く（書きつく）という表現について――「うつほ物語」を中心に――」（『実践教育』一九号、実践女子学園中学校・高等学校、二〇〇〇年）

2　田中仁「『書きつく』の意味――宇津保物語を主な資料として――」（『言語表現の研究と教育』三省堂書店、一九九一年）

3　〈二〉の結論については「実際には『書きつく』はつねにこうした二面性を生かした使い方をされているというわけではない。一方の面のみに依拠して用いられている例もごく少数だが存在する。（中略）しかし、『書きつく』の用例のほとんどには、何らかの形で〈二〉のような二面性が生きているはずである。」（一一九頁）と補足されている。

4　なお、「蔵開・上」巻（五一九頁）に次の例がある。

御折敷見給へば、洲浜に、高き松の下に鶴二つ立てり。一つは箸、一つは匙食ひたり。松の下に、黄金の杙して、帝の御手して書かせ給へり。

緑子は松の餅を食ひ初めてちよちよとのみ今は言はなむ

とあるを、大宮見給ひて、白き薄様に書きて、押しつけ給ふ。

我下りて松の餅を食はすれば千歳も継ぎて生ひよとぞ思ふ

女御の君に、「かかる言ありけりや」とて奉り給へば、書きて、押しつけ給ふ。

生ひの間にちをのみ知れる緑子の松の餅をいかが食ふらむ

とて、一の宮に奉り給へば、物ものたまはず。これか

れ、「いかでか」などのたまへば、

食ひ初むる今日や千代をも習ふらむ松の餅に心移りて

と書き給へれば、女御の君、折敷ながら、中納言の御もとにさし入れ給へば、取りて見るやうにて、

千歳経る松の餅は食ひつめり今は御笠の劣らでもがな

と書き給ふを、弾正の宮、「見む」と聞こえ給へば、「いとかしこき御手侍れば、え見給はず」とてさし入れつ。

ここでは一見、仲忠が洲浜に刺さった杙か何かに直接文字を書きつけたかのように読めるが、「黄金の杙」に和歌を書いたのは朱雀帝であり、その直後に続く大宮は「白き薄様に書きて、押しつけ給」い、仁寿殿の女御も「書きて、押しつけ給ふ」とあることから、朱雀帝以外の仲忠を含む登場人物は、文字を紙に書いたものと考える。

また「国譲・下」巻（七七四～七七五頁）に次の例がある。

大将、持たせ給へりし唐櫃・御衣櫃、山籠りに奉り給ふ。唐櫃には、浅香に沈の脚つけて、蘇枋を朸にして、白銀の鉢・金椀・箸・匙・茶匙・銚子・水瓶など、よろづの調度尽くし入れたり。御衣櫃には、御法服一つ、限りなく清らにて、夜の装束、綾の指貫に、織物の襖、綾の袿どもなどして、その襖に書きて、結びつけたる、

露けくて山辺に一人臥す人の夜の衣に脱ぎ替へよとぞ

子どもの装束、女子のも、いと清らにし入れて、奉り給ふ。山籠り、見て、

世を捨てし苔の衣に脱ぎ替へばまたまたさらに物もこそ思へ

とて賜はり給ひぬ。

これは、紙か何かに文字を書き、襖に結びつけているため、今回の用例群には入れていない。

5 この箇所について、『新編日本古典文学全集　うつほ物語①』は、現代語訳で「人々の御前に置かれた見事な折敷どもをごらんになって、仲忠の侍従が、『花園の胡蝶』を題として歌を詠む」としている。しかし、本論では、「花園の胡蝶に書きて」という記述から、折敷の「花園の胡蝶」「林の鶯」「水の下の魚」「山の鳥」のところに、和歌を書きつけたと読んだ。

6 『うつほ物語　全　改訂版』においては、「春日詣」巻は「嵯峨の院」巻の前に配置されているが、年立の上では、「嵯峨の院」巻は「春日詣」巻に先行する。

7 『うつほ物語　全　改訂版』では、この部分に「仲忠の二二一頁の贈歌は、答歌を得ている。物語には見えないが、それ以後にも仲忠が歌を贈っている趣きである」という注がついている。

なお、「二二一頁」の仲忠とあて宮の贈答歌を引用しておく。

藤侍従、祓へしに、難波の浦まで下りて、それより、
惑ひつつ摘みに来しかど住吉の生ひずもあるか恋
忘れ草
あて宮、
あだ人の心を懸くる岸なれや人忘れ草摘みに行くらむ

（むとう・ながこ　博士後期課程）